主日礼拝説教「あなたが呼び出された理由」

日本基督教団石神井教会　2018年1月21日

【使徒書日課】使徒言行録　9章1～20節

1さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところ
へ行き、2ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出し
たら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。3ところが、サウロ
が旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。4サウロ
は地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。
5「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害
しているイエスである。6起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らさ
れる。」7同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言
えず立っていた。8サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。
人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。9サウロは三日間、目が見えず、食べも
飲みもしなかった。10ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、
「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。11する
と、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウ
ロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。12アナニアという人が
入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たの
だ。」13しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなた
の聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。14ここでも、
御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」15す
ると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわた
しの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。16わたしの名のためにどんなに苦しま
なくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」17そこで、アナニアは出かけて行ってユ
ダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中
に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で
満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」18すると、たちまち目からう
ろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして
洗礼を受け、19食事をして元気を取り戻した。

サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、20すぐあちこちの会堂で、「こ
の人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。

【福音書日課】マルコによる福音書　1章14～20節

14ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、15「時
は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

16イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデ
レが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。17イエスは、「わたしに
ついて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。18二人はすぐに網を捨てて従っ
た。19また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れ
をしているのを御覧になると、20すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを
雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

「わたしについて来なさい」

今日は、礼拝堂に二台のオルガンが並びました。わたしたちが、いつも礼拝で用いているオルガンに加えて、1 階の古いオルガンがここに上げられてきています。先週の主日礼拝中に故障してしまったオルガンの代わりに、いわば予備役のオルガンが呼び出されて、今日の礼拝のために用いられているのです。ほとんど隠退状態で、最近では音を奏でる機会が滅多になかったオルガンです。このように主日の礼拝でフルに用いられるときが再び訪れるとは、思ってもみなかったのではないでしょうか。けれども、この日のために、このオルガンは、静かに生かされていました。この日の呼び出しに、備えさせられていたのです。

わたしたちも皆、このオルガンのように呼び出されて、主の日ごとの教会の礼拝に加えられてきました。今日この日の礼拝のために呼び出されて来たのが、今ここに集わされているわたしたちです。それぞれがバラバラにではなく、同じとき、同じ場所で一つの群れとして神の御前に立ち、共に御言葉を聞き、共に礼拝をささげるように、呼び出されて来たのです。

わたしたちの信仰の原点は、この「呼び出されること」にあります。主なる神は、わたしたちを呼び出してくださったのです。主は、わたしたちを呼び出して、主の御用のための器としてお用いくださるのです。

けれども、わたしたち人間の本質は、「呼び出されること」を好まない者なのかもしれません。自分が相手の都合で「呼び出されること」よりも、人を自分の都合で「呼び出すこと」を好むのです。もちろん、皆さんは、人を「呼び出す」ような態度は失礼なことだとわきまえていらっしゃるでしょう。けれども、だからこそ、逆に誰かに「呼び出される」ようなことになれば、ひどく不快に思うのではないでしょうか。

「**時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい**」と、神の福音を宣べ伝え始められた主イエスが、その福音宣教の初めになさったことは、弟子たちを選ばれることでした。湖で漁の仕事をしていた四人の漁師たちに、「**わたしについて来なさい**」とお呼びかけになられて、従わせられたのです。

主イエスは、彼ら漁師たちの都合などお構いなしのように、その仕事場に押しかけて、ご自分のもとに彼らをお呼び出しになられました。漁師たちは、どこかで主イエスの評判をすでに聞いていたかもしれません。いつか話を聞きに行こうとも思っていたかもしれません。しかし、それは、「今」ではなかったはずです。彼らは、そのとき、自分たちの仕事をしていたのです。

だれにでも、自分たちの生活の都合があるのです。突然の訪問客は、歓迎されません。昨今は、電話さえ、あらかじめメールで断ってからかけないと、迷惑がられます。皆、自分で都合の良いように仕事をし、生活をしたいのです。礼拝さえ、ラジオやインターネットで好きなときに済ませたいと考える人があるほどです。そのような、わたしたちの仕事や生活を中断させ、別のことに呼び出そうとする者に、わたしたちは抵抗するのです。ところが、主イエスとは、そういうお方なのです。神はわたしたちの仕事や生活を中断させる、というのです。

主イエスの眼差しの中へ

「わたしについて来なさい」とお呼びかけになられる主イエスに従って行くというのは、そのような中断を余儀なくされる生き方を始める、ということです。自分で組み立て、建て上げた生活や仕事を、ときに中断させられて、自分自身で組み立てたのでも建て上げたのでもない、別の道に呼び出されて行くのです。

自分自身の道から、別の道、主の道へ。この転換こそ、主イエスが「**悔い改めて福音を信じなさい**」とお呼びかけになられたことでしょう。主イエスが神の福音としてお告げになられた「悔い改め」とは、単なる謝罪や自己省察ではなく、まったく方向転換をすること、生き方を転向することなのです。自分自身の道から、別の道、主の道へ。

しかし、これは容易なことではありません。皆さんの中に、自信をもって「自分は完全に方向転換をし、主の道に従う生き方をまっとうしている」と言える方があるでしょうか。本当にそうなることができていれば、それは幸いなことです。けれども、かの宗教改革者M・ルターは、その改革運動の初めの初めに、こう宣言したのです。「*わたしたちの主であり師であるイエス・キリストが『悔い改めなさい』と言われたとき、彼は、信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みになったのである*」(「九十五箇条の提題」の一)。そうであればこそ、わたしたちは、繰り返し、主に呼び出された者であることを、心と体に刻み直す必要があるのでしょう。主の日ごとの教会に呼び出され、それぞれの仕事も生活も中断して礼拝に集うのは、わたしたちの主イエスに呼び出された者、悔い改めて主の道に従う者としての原点が、ここにあるからです。

けれども、そのことを、わたしたちは何か義務的に自分に課して、達成しようというのではないのです。否、むしろ、そうしようとすればするほど、結果は逆に、主に呼び出された道をまっとうするどころか、自分自身の道を完成させることへと向かってしまうでしょう。

主イエスに従った弟子たちも、その道の途上で、いくどもそのような袋小路に迷い込んだのに違いありません。だからこそ、彼らは、主にはじめて呼び出されたときのことをしっかりと心に留めて、そのときに何が起こったのかを理解しようとしたのではないでしょうか。

主イエスは、そのとき、彼らを**ご覧に**なられた、というのです。主イエスは、彼らに目を向けられたのです。目を向けて、じっと見つめられたのです。彼らが気づいて向き直ると、その目から視線を外されることなく、まっすぐに彼らを見つめられたのです。そうして、彼らは、自分たちをまっすぐに見つめる主イエスの眼差しから、逃れられなくなった。主イエスという方の存在を、無視できなくなった。自分の手を休めても、この方に従わないではいられなくなった。弟子たちの経験したことは、そのようなことだったのではないでしょうか。その意味では、「悔い改め」も、自分で一所懸命に方向転換しようとすることではなく、主イエスの眼差しに捕らえられ、自分のことを放ってでも主の姿を見つめ続けないではいられなくなった、そのような心の変化だったのではないでしょうか。

「人間をとる漁師にしよう」

主は、わたしをご覧くださっている。見てくださっている。そのことに気づいた弟子たちには、主が見えるようになったのです。それまで、たとえ視線の中に入っても認識することがなかったかもしれないお方、主イエスが、見えるようになった。それは、主イエスを通して、彼らが神を見るようになる第一歩だったのではないでしょうか。神の御業を見るようになるはじめの一歩、主イエスが「近づいた」と告げられた神の国を見る者となる入口になったのではないでしょうか。

使徒言行録 9 章に登場するサウロは、わたしたちが使徒パウロの名で呼ぶ一人の青年です。この青年サウロもまた、あるとき、主の眼差しに気づく経験をして、生き方が変わったのです。

サウロは、生前の主イエスと会ったことはありませんでした。けれども、その名を聞き、その道について耳にすることはあったのでしょう。それでも、彼は、自分の道を行く者でした。ユダヤ人として自分の誇るべき道を、彼は持っていたのです。それどころか、主イエスの道に従う生き方をしている者たちを迫害することさえしていたのです。そのサウロが、主の眼差しに気づく経験をしたというのは、どういうわけなのか、わたしたちは、理屈で説明できるわけではありません。しかし、サウロは、間違いなく、主の眼差しに気づく経験をしたのです。それは「**天からの光が彼の周りを照らした**」と表現するしかないような経験でした。

その天からの光の中で、サウロは、主イエスと出会いました。自分のことをご存じの、自分のことをご覧になられている、主イエスに出会ったのです。もちろん、彼が、すぐにすべてを悟ったわけではなかったでしょう。その経験から三日間、彼は、目を開いても見えない、という状態に陥ったのです。それは、それまで彼が自分で見ていると思っていたもの、自分自身の道が、見えなくなったということなのでしょう。その彼を、一人の弟子アナニアが導いて、見えるようにさせました。「**元どおり見えるようになった**」と訳されていますが、「目を上げた」「見上げる」という意味の言葉です。サウロは、自分自身の踏みしめてきた足もとを見つめて歩く道を見失いましたが、かわりに、目を上げて天を仰ぎ、主イエスを見上げて歩く道を見ることができるようになったのです。

このサウロのために用いられたアナニアも、かつて、あの漁師だった弟子たちと同じように主と出会う経験をし、主にご覧いただいている者として、主を見つめ続ける道、主の道へと生き方を向き直してきた一人だったのでしょう。そして、あの弟子たちと同じように、主イエスに「**人間をとる漁師にしよう**」と選ばれた器として、サウロのために用いられる行動を選び取ることができたのです。さらに、サウロも同じように、「人間をとる漁師」として選ばれた器、主がお選びくださった器として、主の道を生きたのです。

主の眼差しは、すべての人に向けられています。その眼差しに気づかせ、主を見る者とするために、主は、弟子たちを用い、アナニアを用い、サウロ＝パウロを用いられました。主は、わたしたちをも、主のお選びになれた器としてお用いになられるために、今日もお呼び出しくださったのです。